

昭和二十二年十一月二十九日乗船、十二月一日舞鶴港に着いたときを今も忘れることのない気持ちであります。

## 抑留記

千葉県 磯貝 恭三

私は、日本の敗戦の色が濃くなった昭和十九年、徴兵検査を一年繰り上げて現役兵として神奈川県相模原市の通信隊に入隊した。仮兵舎に入れられ、内地には幾日もいなかった。列車に乗せられ下関に着き、そこから朝鮮半島の釜山に向け出発したのであったが、その船の中でいろいろと敵の潜水艦が出没するとか聞かされ、無事釜山に着くのか非常に不安であった。それでも何も変わったこともなく釜山に上陸し、ほっと安堵した。昭和十九年末であった。

私たちは列車に乗せられ朝鮮半島を縦断し、一路満州に向け出発した。着いたところは新京の満州第七五

八〇部隊であった。到着した二、三日は何となくのんびりした気がしましたが、いよいよ教育が始まった。何もわからない通信の教育、毎日毎日モールス符号の受信ばかり、果たして私は覚えることができるだろうか心配で、寝てもトンツォを夢にまで見る状況でした。次には送信の訓練となった。百姓ばかりしていたゴツイ指先で電鍵を打つことは苦痛でもあったが、何とか半年間の教育で私もどうやら皆さんと一緒に肩を並べることができました。教育が終わり、一等兵の階級章をつけることができました。

そのうち、ついにソ連が参戦してきた。将校たちを初めとし私たちも緊張した。そして敵の戦車を迎え撃つため決死隊が編成された。肩に爆雷を背負い、戦車に体ごとぶつかる。ぶつかったら最後、万が一にも生還は考えられない。部隊の所要所に配置されたが、その爆雷は一個も使わずに武装解除され、ソ連の捕虜となった。

「いよいよお前たちは日本に帰るのだ」、その言葉を信じた私たちは装具を身に付け集合し、行き先も告げ

られず行軍させられた。行けども行けども、どこともわからない道を歩き続けた。

ちょうど九日間歩き続けたところで、ある駅に着いた。そこで三日か四日間、何をするのでもなくその駅に留まった。やがて列車が入ってきて、そのまま無蓋車に乗せられた。どこに行くのか何もわからないまま幾日走ったことであろうか、列車は駅のないところで止まった。そこで下車させられた。町らしい町ではなかったが、ちらほらと民家が散在していた。そこを通り越し、約半日くらい歩いたところで収容所らしい建物が目に止まった。そこに入れられるのではと思つたが想像に違わず、その収容所の表門で止まり、そのまま、いつ帰ることができるのか何もわからないまま収容所に入れられた。

その収容所は四角く、一番外側は高い板塀で囲まれ、その内側約五メートルくらいのところに鉄条網が張り巡らされ、四隅の望楼がその板塀の高さよりも高く建てられ、ソ連兵がいつも監視の目を光らせ、板塀と鉄条網の間にも入れれば望楼から弾丸が飛んでくる仕組

みになっていた。

また、私たちが入れられた建物は丸太小屋であった。丸太を横に組み合わせて積み上げ家を造り、その丸太と丸太との間の隙間は土や苔などでふさがれ、寒さを防ぐようにできていた。室内は両側が三段に寝るようできていた。私たちは少ない毛布をお互いに譲り合い、また重ね合つて寒さを防ぎ、生きて帰ろうと誓い合つたのであった。

冬が来て作業が始まった。伐採作業であった。直径一メートル以上の松の木の根切り作業で、二人一組で鋸を使い交互に引くのであった。冬の間は雪と氷で覆われているが、夏の間は湿地帯で山の中へは入れず、伐採は冬の仕事であった。

三分か四分粥を飯盒の三分の一くらいの量を一日分として配給される。伐採作業は重労働であるので、こんな食糧事情では作業量も落ちてくる。そこで私たちは携行する飯盒の粥を朝食へしてしまう。それでも満腹感ではなかつた。次は昼食であるが、朝全部食べてしまうので昼食はもろくない。そこで、松の木を切ると

松傘がいつぱいなっているので、二百ないし三百くらいの松傘が落ちる。その松傘を両手でつかんでねじると、中から種子が出てくる。これを食べて空腹の足しにしたのでした。

収容所に帰つてくると早速松まきを燃やし暖房をとるので、朝になると皆の顔は煤で真つ黒であった。上部の三段に寝ている者はなおさら真つ黒だったが、だれ一人として笑う者もなく、また顔を洗う石鹸があるわけがなく、ただ拭くだけであった。

食糧が前に述べたような状態であったので、ノルマ（作業量）の達成は到底おぼつかない。そこで私たちは考えた。昨日切った松の木の雪を払い落とし、今日切ったように見せかけてノルマを百パーセント遂行した。ずるい考えをしたが、生きて帰るためには致し方なかつた。

夏は主にジャガイも掘りと牧場の牛の監視で、体は楽であった。着ているものが軽くなるので、なおさら体力を保つことができた。ジャガイも掘りは、飯盒で茹でて食べることができたので、まれに満腹感を味わ

うこともあつた。

その他、道路工事のような作業をしたが、ただ帰りたい一心で働いた。チタとかウオロシロフとかいうところのようです。

生きて舞鶴へ上陸したときは、ただ嬉しさで日本の土を踏んだ。とめどなく出る涙を拭いもせず、跳ねて土を踏んだ。

最後に、あのシベリアの地で亡くなられた方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

昭和十九年十二月二十五日 満州第七五八〇部隊入隊

新京にて終戦

在ソ期間 二年三カ月